

二〇二六年度

二月二日午後入試

国語 (45分)

注意 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。

2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。

3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。

4 問題のページは、4-1 から 4-13 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

高校一年生の「私」(立石の花)は、オンライン英会話でフィリピン人講師の「ジョシユア先生」と出会ったのをきっかけに、フィリピンに興味を持つ。「私」は、所属するクッキング部が縁日に出す一日カフェの企画として、ハロハロ(「ハロ」は混ぜるの意味。かき氷にさまざまな具材をのせ、混ぜ合わせて食べるフィリピンのスイーツ)とフィリピンの昔話を組み合わせ紹介することを提案する。フィリピンの昔話「サルとカメ」を語る練習を続ける「私」だが、「ジョシユア先生」が急に講師を退職するという情報が飛び込んできた。

二日後。ずっとイヤホンをしてるみたいに、学校の授業も耳に入ってこなかった。ついに夕方六時。

見えないイヤホンがすぽっと抜け、緊張する指先でログインする。

「Hello!」

スマホに映ったジョシユア先生は、おなじみの青いTシャツ姿。いつもと変わったところはない。

私は予め調べておいた英語で尋ねた。

「Are you going to quit this job? (先生、この仕事を辞めるんですか?)」

先生は少し眉を下げた笑顔で、小さく頷いた。

「Yes, I'm going to work in Japan. (うん。日本で働くことになったんだ。)」

「日本?」

思わず日本語で叫んでしまった。

「Working in Japan has always been my dream. I work as an interpreter at a company in Osaka.

(日本で働くことは、ずっと僕の夢だったんだよ。大阪の会社で×××をするんだ。)」

「いったーぶりたー?」

その単語を知らない私に、先生は手振りを交えながら噛み砕いた英語で説明してくれた。

「どうやら、「通訳者」って意味みたい。」

でもちよつと待って。通訳ってことは……。

①「……Can you speak Japanese? (先生、日本語話せるんですか?)」

不意打ちをされたように、先生ははにかんだ。

②「大学の頃から日本語を学んでたんだ。」

あぜん。

だって、返ってきたのは流暢な日本語だった。まるで吹き替えの映画を見てみたい。

そっか、英会話の勉強だから、私にはわざと日本語が分からないふりをしてたってことなんだ……。

「ノノカが『サルとカメ』を聞かせて頼んだとき、僕は日本語で教えてあげたかった。でも、よく頑張ったね。」

ジョシユア先生がもし日本語で語ってくれてたなら楽だった。

だけど、先生からもらった言葉だから頑張れたミッションだったんだ。

「急に辞めることになってごめんね。家族のために日本で働きたいんだ。僕の学費は、姉さんが海外で稼い

してくれた。僕も、下のきょうだいたちのために働きたい。」

「……先生は、七人きょうだいでしたよね。」

ハロハロパーティーのとき、私を抱きしめてくれたマリアさんの力強い腕を思い出す。\*

家族のため、大切な人のためにフィリピンの人たちは頑張ってる。ジョシユア先生もその一人なんだ。

「楽しかったよ、ノノカ。」

ジョシユア先生は両頬に笑窪を浮かべ、スマホの向こうで右手を差し出した。

ああ、これって。

私は四月の体験レッスンを思い出す。あのときも、こうしてジョシユア先生はエア握手をしてくれた。あの手を握ったときから、フィリピンがぐっと近くなったんだ。

もしも願いが叶うなら、その手を直接握りたい。

③ 先生が日本に来るってことは、距離が縮まるってことなのに。もうこうして顔を合わせられない。近くなるのに遠くなってしまう。

接点のなくなる私たちの世界は、混ざり合わないんだ。

それなら、その前に。

「ジョシユア先生、一つだけお願いをしてもいいですか。」

「うん、何?」

「よかったら今日、私の日本語の『サルとカメ』を聞いてもらえませんか。」

ほんとは、今日は英文法の授業だって分かっている。普段の私だったら、そんなお願いはしない。でも。

※ 『おはなしは、語り手と聞き手が一緒に作り上げる、一期一会の世界なのよ。』

※ おばあちゃんは、そう言っていた。

ジョシユア先生に聞いてもらえるチャンスは今しかない。一度だけ二人の間に、おはなしの世界を作ってみたかった。それが、連絡先の交換よりも、私が望んでいることだった。

「Wow! 聞かせてくれるの?」

私は頷く。まだ『サルとカメ』を“自分のもの”にできている自信はない。

それでも、今できる精一杯で語りたい。ジョシユア先生から聞かせてもらった昔話を、今度は私の言葉で聞いてもらいたい。

「聞いてください。フィリピンの昔話、『サルとカメ』。」

本番までの残り三日間。

水曜日の夜、レッスンを終わってから何度も『サルとカメ』の練習をした。

もうストーリーは頭に入ってるから、私は目を閉じて物語の世界を何度も想像した。

私の思い描くこのイメージを聞き手の人たちに伝えられるような語りをしたい。

でも、それってそんなに簡単に達する域じゃない。相変わらず再話の文章を暗唱することで精一杯だ。でも、くじけそうになるたび思い出すのは、ジョシユア先生との最後のレッスン。

先生に『サルとカメ』を聞いてもらうことができた。

二回つかえてしまったし、頭で考えなくても口から言葉が出てくる感じには程遠かった。それでも。

「すごいよ、ノノカ。これをフェスティバルで語るんだね。」

ジヨシユア先生は、私の語る『サルとカメ』を聞き終わると、そう褒めてくれた。

「僕はいつか、フィリピンと日本の架け橋になりたいと思ってる。君も同じだね、ノノカ。フィリピンの昔話を日本で語るでしょ？ 君は昔話を語ることで、日本とフィリピンをつなげようとしてる。」

⑤ 私は慌てて首を横に振った。

だってそんな立派な志じゃないよ……。

「もつと練習しなきゃと思ってるんです。」

「大丈夫、Kaya mo yan!」

「かやもやーん？」

※「タガログ語で『君ならできる』っていう意味。応援するときのかけ声だよ。」

オンライン英会話の時間に日本語で昔話を語って、タガログ語の応援の言葉をもらうなんて、何だかごちゃ混ぜで笑ってしまう。

これはたった一つ、先生から教えてもらったフィリピンの言葉。

形のないこのお守りを、本番、一日カフェの会場まで握りしめていこう。

十月の第四土曜日。一日カフェの当日が来た。

縁日が行われる市民プレイスは、地域の人たちで賑わっていた。

野菜や工芸品の販売。秋晴れの屋外ではダンスの発表やミニコンサートが行われていた。

五階の一日カフェにも、九時の開店直後から続々とお客さんがやってきた。

接客をする多目的室は教室と同じくらいの広さで、四人掛けのテーブルが八つ並んでいる。

前日の放課後、部員みんなで黄色と紫のバルーンで飾りつけをした。黄色は、バナナやマンゴーといったフィリピンのフルーツのイメージ。紫は日本のあずきのイメージだ。

小さな子どもからお年寄りまで、お客さんたちがフィリピンのハロハロを食べている。その光景を見た気持ちは何て言葉で表現したらいいんだろう。

多目的室の様子を覗いて、隣の調理室に戻ってきた私は、<sup>⑥</sup>風羽ちゃんの着ているエプロンをちよんと引っぱ張った。

「風羽ちゃん、やばい。私、何かすごくうれしい。」

「ぼーっと感動してる場合じゃないよ。ノノ、もうすぐ一回目の発表でしょ。」

アイスを盛りつけていた風羽ちゃんが時計を見やる。

発表は十一時と十四時の二回。

※「立石さん、もうすぐ出番だよー！」

想太郎長の声かけにドキッとして、盛りつけていたバナナチップスを落としそうになる。

私、本当にあそこで語るんだ……。

「フリースペースも準備OK。昔話の最中に来たお客さんたちは、そっちに案内するから。」

※矢崎先輩がフリースペースから調理室に戻ってくる。

「ありがとうございます！ じゃあキッチン抜けまーす。」

私はエプロンを外し、調理室の隣の多目的室に入る。

お客さん、結構いる……。四人掛けのテーブル席には、ざっと数えて二十人くらい。お母さんの膝に座る

小さな子から、年配の男女まで集まっていた。ハロハロを食べている最中の人もいれば、もう食べ終わって待っている人もいる。

開始時刻の十一時まであと二分。ドアの手前では、かすみんが見守ってくれている。<sup>※</sup>  
深呼吸。大丈夫、<sup>だいじょうぶ</sup>何度も練習したんだから。

「みなさん、お待たせしました！ えー、まもなく、フィリピンの昔話の時間です。」  
想太郎が太鼓みたいにドドンと響く声で、お客さんたちに告げた。

「語ってくれるのは、うちのクッキング部一年生、立石さんです。」

私は窓を背に、用意してもらったイスに座った。

どくどくと、体中の脈が速くなっているのがわかる。

「こんにちは。立石の花です。今日はフィリピンの『サルとカメ』っていう昔話を語ります。ハロハロのトッピングの一つだと思って、どうぞごゆっくりお楽しみください。」

いざ語り始めようとしたとき。

「え、何してんの？」

ガラスをはめ込んだドアの向こうから、声が聞こえてきた。

同じクラスの男子たちだ。片手にハロハロを持ち、スプーンを口にくわえて、会場を覗き込んでいる。

うわっ。あの人たちが縁日に来るなんて思わなかった。

イヤだ見ないで。変なことしてるって指さされたくない。

私は膝の上で拳をぎゅっと握った。

どうしよう……。口を開くのが怖い。

そのとき。男子たちを押しつけてガラッとドアを開けた人がいた。

「遅れてごめんねー！」

雲の間から現れた太陽みたいに明るい声の主は、マリアさんだった。その両手はケンくん、<sup>※</sup>エミリちゃん  
とつながれている。

会場の注目を集める三人を、

「どうぞ、あそこの空いている席におかけください。」

かすみんがテーブルに案内する。

「あ、ノノちゃん、いたー！」

「ノノ、『サルカメ合戦』聞きに来たぞっ。」

エミリちゃんとケンくんが私に手を振ってくる。

本当に来てくれたんだ……。会場にいないから、午後の回か、別の用事ができちゃったのかと思っただ。  
頑張らなきゃ。やるって決めたんだから。

<sup>⑦</sup>でも、まだドアの向こうにいるクラスメイトたちが気になって仕方ない。  
相反する気持ちに板挟みになっていると、マリアさんが拳を高く上げた。

「ノノカちゃん、Kaya mo yani!」

エミリちゃんやケンくんよりもさらに大きなその声援が、会場に響いた。

<sup>⑧</sup>Kaya mo yani

そうだ。

ジヨシユア先生もそう言ってくれた。君ならできるって。私は心のなかのお守りを握り直した。

ふと、私の膝の上に、小さなバッグが載っているような気持ちになった。

そのバッグに詰まっているのは、「サルとカメ」のたくさんの場面のイメージだ。

クラスメイトにどう思われたって関係ない。私はフィリピンが好き。今日ここにいる人たちに、フィリピンの昔話を届けたいんだ。

バッグを開く気持ちで、私は口を開いた。

「昔々のことです。あるところにサルとカメがいました。ふたりがしゃべりながら散歩していると、川から一本のバナナの木が流れてきました。」

語り始めると、バッグから溢れるようにイメージが私の目の前に流れ出してきた。

サルとカメがふたりで散歩している場面。

川からバナナの木が流れてきた場面。

サルとカメが木を半分こしている場面。

意地悪なサルがバナナを独り占めしている場面。

怒ったカメが仕返しを決意する場面。

不思議。

暗記した文章を思い出そうとしなくても、一つ一つの場面のイメージが言葉を引き出してくれる。まるで、メロディーに歌詞を乗せて歌っているような。

ああ、そっか。

⑨ 今頃、おじいちゃんの付き添いで病院にいるおばあちゃんに、心のなかで話しかけた。

昔話を「自分のもの」にするっていうのは、きつとこういう感覚なんだね、おばあちゃん。

私はお客さん一人一人と目を合わせて語った。みんなの心に「サルとカメ」のイメージが届きますように。

「こうして、カメは川をすいすい泳いでいったのでした。めでたしめでたし。」

最後の場面のイメージを語り終えると、会場が拍手に包まれた。

「おもしろかったねー。」という親子の声が、ハロハロの仕上げのコンデンスミルクみたいに、胸に染みていく。

⑩ いつの間にか、ドアの向こうにいた男子たちの姿は消えていた。

そうだ、お礼を言わなきゃ。マリアさんたちのテーブルに駆け寄ると、

「ノノカちゃん、最高だったよー！」

マリアさんが、私の手をぎゅっと握った。

「マリアさんたちの応援があったから、語れたんです。」

もし、あのタイミングで三人が来なかったら。Kaya mo yani の言葉がなかったら。

私はきつと自分の「サルとカメ」を語れなかった。

「ノノちゃん、あたし見えたよ。」

エミリちゃんが私のセーターの裾を引っ張る。

「ん？」

しゃがんで視線を合わせると、エミリちゃんはにっこり笑った。

「ノノちゃんの昔話聞いてたら、サルとかカメとか、黄色いバナナとか、目の前に見えた。」

「うわ、ほんとっ？ ありがとう。」

きつと伝わったんだ。私の差し出した物語のイメージが、聞いてくれる人に伝わったんだ。

「ノノ、昔話もう一回やるんでしょ？ 午後も聞いてあげてもいいよ。」  
ケンくんのエラそうな口ぶりに、思わず笑ってしまう。

⑩ こんな手ごたえを感じたら、午後の発表も頑張れる。  
⑪ またもう一度、一期一会の世界を作るんだ。

十四時の発表も終わった。  
お客さんの顔ぶれが違っていると、また新鮮な気持ちだった。  
私、ここで二回も昔話を語ったんだ。

あがり性で引っ込み思案な自分が必要なことをしたなんて、何だか信じられない。  
発表用の自分のイスを片付けていると、

「あなたきれいな声ねえ。」

真っ白な髪を結ったおばあさんがそう話しかけてきて、私の手を取った。

「透明感があつて、とっても聞き取りやすかったわ。」

「ほんとですか？ ありがとうございます。」

そんな風に褒められるなんて。答える声が自然と弾んでしまう。

「うちのアパートにね、最近フィリピン人の学生さんが引っ越してきたのよ。今まで会話のきっかけもなかったけど、この昔話知ってるか聞いてみるわね。」

「はい、ぜひ！」

頭のなかに、このおばあさんとフィリピンの学生さんがおしゃべりしている場面が浮かんだ。アパートの廊下で、楽しそうに。

⑬ 私の知らないどこかで、また日本とフィリピンの人が混ざり合うんだ。  
ほんのちよつとだけ、胸を張りたくなかった。

(こまつあやこ『ハロハロ』より)

※(注)

マリアさん——「私」の友達である「風羽ちゃん」の母親。フィリピン人。「風羽ちゃん」と血はつながっていない。

おばあちゃん——「私」の祖母は、図書館で昔話を語るボランティアをしている。

再話——語るのに適した文章に直すこと。

タガログ語——フィリピンで用いられている言語の一つ。

風羽ちゃん——「私」の友達。「私」がフィリピンに興味を持ったことをきっかけに仲よくなった。

想太郎長——クッキング部の二年生で部長。

矢崎先輩——クッキング部の二年生で会計。

かすみん——「私」と「風羽ちゃん」のクラスメイトで、クッキング部員。ふたりをクッキング部にスカウトした。

ケンくん、エミリちゃん——ふたりとも「風羽ちゃん」のいとこ。

問一 —— 線① 「不意打ちをされたように、先生ははにかんだ。」とありますが、このときのジョシユア先生について説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 日本語を話せることを「私」に指摘しめてされたので慌あわてている。
- イ 日本語を話せることを「私」に気づかれておどろいている。
- ウ 日本語を話せることを「私」にさとられてはずかしがっている。
- エ 日本語を話せることを「私」に知られてしまって悲しがっている。

問二 —— 線② 「あぜん。」とありますが、このときの「私」について説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「ジョシユア先生」が自分には日本語を話せないふりをしていたことに不満を感じている。
- イ 「ジョシユア先生」が日本語をなめらかに話したのでおどろいて言葉が出なくなっている。
- ウ 「ジョシユア先生」が以前からずっと日本語を学んでいたことを知ってうれしくなっている。
- エ 「ジョシユア先生」が日本語を話せることを隠かくしていた理由がわからずにとまどっている。

問三 —— 線③ 「近くなるのに遠くなってしまう。」とは具体的にはどういうことですか。解答さんの「ということ。」につながるように答えなさい。

問四 —— 線④ 「このイメージ」とありますが、「この」は何を指していると考えられますか。文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

問五 —— 線⑤ 「私は慌あわてて首を横に振ふった。」とありますが、このときの「私」について説明したものとしてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分のしていることを「ジョシユア先生」が想像より高く評価してくれたのできまりが悪くなっている。
- イ 自分は「ジョシユア先生」が思ったような大きな目標を持っているわけではないと伝えようとしている。
- ウ 「ジョシユア先生」から自分では思いも寄らなかつた期待をかけられていると知り、おどろきとまどっている。
- エ 「ジョシユア先生」さえ褒ほめてくれれば自分は満足なのに、そのことを理解してもらえず残念に思っている。

問六 —— 線⑥ 「風羽ちゃんの着ているエプロンをちゃんと引っ張った。」とありますが、このときの「私」について説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア お客様たちが予想よりも多く来ているのでうれしく思う反面、たくさんの方の前で発表することに対しての不安感も増している。

イ お客様たちがひっきりなしにやって来るうえに、ハロハロを食べているお客様の種類も老若男女と幅広いので困惑している。

ウ お客様たちが次から次へと店内に訪れ、自分たちが作ったハロハロを食べてくれることに喜びを隠しきれなくなっている。

エ お客様たちの数が思ったより多く、この後の自分の発表も大勢の前ですることになるので、がんばろうと決意を新たにしている。

問七 —— 線⑦ 「相反する気持ちに板挟みになっている」とありますが、このときの「私」の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「マリアさん」たちが自分に話しかけたり手を振ってくれたりしたことがうれしいという気持ちと、そのせいでクラスメイトたちから注目を浴びてしまうから恥ずかしいという気持ち。

イ 発表をしっかりとやり遂げなければいけないという気持ちと、会場を覗き込んでいるクラスの男子たちに自分の発表を見られたら何を言われてしまうだろうかと恐れる気持ち。

ウ 応援してくれている人がいるのだから頑張らなければならないという気持ちと、発表を成功させることができるかどうか不安でこの場から逃げだしてしまいたいという気持ち。

エ 「マリアさん」たちが会場に来てくれたことに感謝する気持ちと、午後から来ると思っていたマリアさんたちが思ったより早く来てしまったて心の準備ができていないとあせる気持ち。

問八 —— 線⑧ 「Kaya mo yari」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「Kaya mo yari」とはどの国の言葉で、どのような意味を持っていますか。それぞれ答えなさい。

2 「私」として「Kaya mo yari」という言葉はどのようなものですか。文中から八字でぬき出して答えなさい。

問九 — 線⑨「昔話を『自分のもの』にするってというのは、きつとこういう感覚なんだね、おばあちゃん。」とありますが、「昔話を『自分のもの』にする」ことができるようになるのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自分の中にある物語世界のイメージが、自然と昔話を語る言葉となって表に出てくるようになる。  
イ 昔話をただ語るのではなく、まるでメロディーに乗せた歌のように節をつけて語れるようになる。  
ウ 暗記した文章にとらわれることなく、新しい場面をその場で考えながら作り出せるようになる。  
エ 場面のイメージだけが心に浮かんでくるようになって、お客さんの存在を気にしないようになる。

問十 — 線⑩「そうだ、お礼を言わなきゃ。」とありますが、「私」はどのようなことに対して感謝しているのですか。それを説明した次の文の  I ・  II にあてはまる言葉を  I は十字以上十五字以内、  II は十字で文中からそれぞれぬき出して答えなさい。

I おかげで、  II を語ることができたことに対して感謝している。

問十一 — 線⑪「こんな手ごたえを感じたら、午後の発表も頑張れる。」とありますが、どのようなことに対して「手ごたえを感じた」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 発表を聞きに来た多くの人を感動させたことで、これまで自分を悪く言っていた同じクラスの男子たちを見返せたこと。  
イ 昔話を自分が語ることによって、場面をありありと思い描いてもらえるほど物語のイメージを聞き手に届けられたこと。  
ウ お話の内容を知っている「エミリちゃん」や「ケンくん」にさえ、もう一度聞きたいと思わせられるほど自分の語りの技術が上達したこと。  
エ これまでずっとあがり性で引っこ込み思案だった自分が、午前の発表を成功させた経験を通して弱みを取り越えられたこと。

問十二 — 線⑫「またもう一度、一期一会の世界を作るんだ。」とありますが、ここで言う「一期一会の世界」の説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 語り手の心の中で作られ、語りを通じて聞き手の心にイメージとして共有される物語世界。  
イ 聞き手ひとりひとりが語り手の語りにイメージを呼び起されることで心に思い浮かべる物語世界。  
ウ その場に集まった語り手と聞き手が共に作り上げる、その場限りの語りの空間や物語世界。  
エ 一言一句も間違えずに語ることによって毎回同じイメージが浮かび上がる語りの空間や物語世界。

問十三

——線⑬「ほんのちよっとだけ、胸を張りたくなかった。」とありますが、このような気持ちになったのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自分がフィリピンの昔話を語るのを聞いたおばあさんが、声がきれいで聞き取りやすかったと思いがけずほめてくれたから。

イ 自分がフィリピンの昔話を語るのを聞いたおばあさんが、生きていく活力や近所づきあいをしていく元気を取り戻したから。

ウ 自分がフィリピンの昔話を語ったことがきっかけとなって、地域からフィリピン人に対する思いこみや差別をなくせたから。

エ 自分がフィリピンの昔話を語ったことがきっかけとなって、日本人とフィリピン人との新しい交流が始まりそうだったから。

問十四

次のア～エの中で本文の内容にあうものには○を、あわないものには×をつけて答えなさい。

ア 「ジョシユア先生」はかつて姉が自分のために働いて学費を工面してくれたので、自分自身も下のきょうだいのために日本で働くことを選び、大阪の会社で通訳者の仕事をするようになった。

イ 「私」は「ジョシユア先生」から「サルとカメ」を聞かせてもらったが、「ジョシユア先生」は英会話の講師としての立場から英語で話したので、「私」は自分で「サルとカメ」を再話しなければならなかった。

ウ クッキング部の部員たちは「私」がフィリピンの昔話を語る企画に協力的であり、「私」が発表の本番を前にして緊張してしまったときもはげましてくれたので、「私」は心の落ち着きを取りもどせた。

エ 会場にやって来た「私」のクラスメイトの男子たちは「私」を見たとき、初めは変なことをしていると思ったが、「私」の発表を聞き終わるころには「私」の語る昔話に夢中になっていた。

問十五

この作品の表現についての説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 一部の外国の言葉がひらがなで表記されていることによって日本語話者である「私」がその言葉の意味を理解できていないということを表現している。

イ 「私」の状態や「私」が感じたことを読者に伝えるための方法として「くみたいに」という形を用いて具体的な物をあげてたとえる表現が何度も使われている。

ウ 異なる国同士の人や生活が「混ざり合う」ことがテーマの一つとしてあり、作品の題名にもなっている「ハロハロ」はその象徴としてあつかわれていると考えられる。

エ 一人称で書かれているため、読者は主人公である「私」が心の中で思ったことや、他の登場人物たちのその時その時の本心を知ることができる。

問六 「私」が語った「サルとカメ」の昔話のあらすじは、同じ本の中でⅠのように紹介され、日本の「サルカニ合戦」という昔話(Ⅱ)と似ているが違(ちが)うところもあるとされています。ⅠとⅡの文章を読み比べて、後の1・2の問いに答えなさい。

## Ⅰ

サルとカメが散歩をしていると、小さなバナナの木を見つけた。木を半分こにしたものの、上半分をもらった怠(なま)け者のサルは枯(か)らしてしまう。

下半分をもらったカメは、それを大事に育て、おいしそうなバナナが実(み)った。

その木に登ったサルはカメのバナナを独(ひと)り占(じ)めて食べ、カメに「バナナがほしい」とお願いされても皮を落とすばかり。

聞いているうちに、ふと気づく。

あれ？ このストーリーって何となく……。

「これ、『サルカニ合戦』とおんなじじゃん！」

「エミリも知ってる！ 幼稚園(ようちえん)で聞いたことあるもん。」

私が思っていたことを二人が叫(さけ)んだ。

「オレ、分かった。カニじゃなくてカメだから、『サルカメ合戦』だっ。」

「きやはは、サルカメかつせーん！」

そう、不思議なことにその設定は、日本の「サルカニ合戦」にそっくりだった。

カニとカメ。柿(かき)とバナナ。登場人物やアイテムは微妙(びみょう)に違(ちが)うし、後半になると、ストーリーにも違いが目立ってくる。

頭に来たカメは、木の周りにたくさんイバラを置く。下りてきたサルはそれを踏(ふ)んでケガをする。

仕返しされたサルは、カメを穴に埋(う)めようとするが、カメはそんなの平気だと言う。バナナの木に縛(しば)りつけようとしても、それも平気だと言う。山に置き去りにしようとしても、やっぱり平気だと言う。

しかし水に投げ込(こ)もうとすると、今度は「やめてくれ」と泣く。喜んだサルはカメを川に投げ込む。

すると、カメは笑いながら得意の泳ぎで逃(に)げていった。(こまつあやこ『ハロハロ』より)

## Ⅱ

【「サルカニ合戦」のあらすじ】

昔々、カキの種を拾ったさるがおいしそうなおにぎりを持ったかにはばったり出会いました。

さるはおにぎりが欲しくなったのでカキの種とおにぎりを交(こう)換(かん)しました。

かにはカキを大切に育てやがてたくさんの実(み)がなりました。

ところがかには木登りができません。困っているときさるがやってきました。

さるは木に登るとそのまま実を食べてしまいました。

かには「私にもとって下さい」と言いましたが、さるはかにはに実をぶつけました。

かには怪我(けが)をして家に帰りました。

かには友だちのうす、はち、くりに助けを求めました。

みんなはさるの家にいき、こっそり隠れてさるの帰りを待ちました。

さるが家に着き、囲炉裏で暖まったとき栗がはじけてさるのお尻に向かって飛び出しました。

「あつい！」さるはお尻を冷やそうと水瓶のところへ行くと水瓶に隠れていたハチに刺されました。

「痛い！」さるが逃げだそうとしたとき、うすが屋根の上から飛び降りました。

「ごめんなさい。もういじわるしないでから許してください。」

それから改心したさるはみんなと仲良くなりました。

(文化庁『生活者としての外国人』のための特定のニーズに対応した日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラム (A) 紙芝居『White Crows』『やるかに合戦』『Donkey and Wolf』より日本語文のみ抜粋し、一部誤植と思われる箇所<sup>かしょ</sup>に手を加えました。)

([https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/seikatsusha/h24\\_nihongo\\_program\\_a/a\\_9.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/h24_nihongo_program_a/a_9.html))

ⅠとⅡの話の展開を比べたとき、ⅠとⅡに登場するサルには似ているところがいくつかあります。似ているところを一つ取りあげ、次の文の□にあうように簡潔に答えなさい。(いくつかある似ているところのどれを取りあげても採点には影響しません。)

どちらの昔話も□ところが似ている。

2 ⅠとⅡの物語の結末についての違いを次のようにまとめました。□にあてはまる言葉を考えて簡潔に答えなさい。

「サルカニ合戦」では、カニの友だちがサルに仕返しをしたのに対し、「サルとカメ」では、□ところが違う。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 工場で電気製品をリョウサンする。
- ② ボクドウが羊を育てる。
- ③ 観光地をユウランして回る。
- ④ 国内のキカンとなる事業を育成する。
- ⑤ お客さんに注文の品をオサめる。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 一つだけ買うと割高になる。
- ② 新入社員が部長に重宝される。
- ③ たがいに策略をめぐらす。
- ④ 自分の落ち度をすなおに認める。

問三 次の①～④の文は「心」という漢字をふくんだ言葉を使っています。□にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ① 親友の君からそのようなことを言われるなんて心□だ。
- ② 野球の試合でホームランを打ち、□心の笑みをうかべた。
- ③ 怒りに発した父は、息子を大声でしかりつけた。
- ④ 大学生の兄はアルバイトもせず、両親にお金を□心している。

問四 次の①～④のア～エの四字熟語の中には間違った漢字を一字使ったものがふくまれています。それぞれア～エの中から間違った漢字一字をふくんだものを一つずつ選び、その記号を答えなさい。また、間違っている漢字の部分の正しく書き直し、四字熟語の形で答えなさい。

- |   |   |      |   |      |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | ア | 以心伝心 | イ | 公明正大 | ウ | 転変地異 | エ | 一刀両断 |
| ② | ア | 電光石火 | イ | 半真半疑 | ウ | 異口同音 | エ | 言語道断 |
| ③ | ア | 流言非語 | イ | 单刀直入 | ウ | 独断専行 | エ | 二束三文 |
| ④ | ア | 单纯明快 | イ | 自画自賛 | ウ | 起死回生 | エ | 温古知新 |



